

滋賀県文化審議会評価部会第13回会議 議事録概要

- 1 日時 平成29年11月10日(金) 10:00~12:00
- 2 場所 滋賀県庁本館4A会議室
- 3 出席者 委員：中川委員、富永委員、東委員、直田委員、殿村委員、吉本委員
(6名出席)
- 事務局：村田管理監、田島課長、野瀬補佐、明石主幹他
- 4 議題
- (1) 平成28年度の滋賀県文化振興基本方針(第2次)評価指標の実績について
 - (2) 平成29年度における個別事業評価について
 - (3) 報告事項
 - ・滋賀県文化審議会第18回会議の概要について
 - ・東京2020大会の文化プログラムについて
 - (4) その他
- 5 議事録概要 以下のとおり

■ 管理監挨拶

■ 議題

(1) 平成28年度の滋賀県文化振興基本方針(第2次)評価指標の実績について

委員	重点施策1の延観光入込客数についてですが、数年前から、県が力を入れているビワイチのお客さんは観光客という数え方になるのか、また違う枠組になるのか、どうなのでしょう。観光客とも言えますし、運動が目的とも言えるので、どういうカウントするのかで、もしかすると数が変わるのかなという気がしました。
事務局	観光入込客数のカウントの仕方は、定められた観光ポイントでカウントをしているというのを伺っているのが一点、また観光の地点という意味合いではビワイチで訪れた方の目的がスポーツ・レクリエーションになる可能性が非常に高い。サイクリングでございますので。こちらの方で評価指標とさせていただいておりますが、あくまでも「歴史・文化」および「催行事とイベント」という分野でございますので、それらを足した数字で評価指標の数値とさせていただいておりますので、この指標数値には入っておりません。

委員	<p>ホームページの閲覧というところで、県のホームページの閲覧数が気になります。</p>
事務局	<p>県のホームページにつきましては、27年から28年度にカテゴリーと言いますか、サイトの標記項目が変更になりまして27年度につきましては、「家庭文化」「暮らし文化」「暮らし文化財」とカテゴリーが3つに分かれておりまして、その数字を集計しておりました。28年度から「文化芸術」「文化財」ということで、カテゴリーが変わったことが影響したものと考えております。</p>
委員	<p>芸術鑑賞した小中学生の数、文化・芸術の体験学習を行う児童生徒数ですが、これはかなりの生徒数が行っていると見ているのですが、あと少し足りない。全ての子どもが見ている訳ではないということで、芸術鑑賞した小中学生数の内訳の近代美術館、びわ湖ホールとびわ湖芸術文化財団がありますけど、多少地域偏差というのはあるのではないかと思います。そのデータが今後拾えれば対応策を検討できると思います。</p> <p>また、滋賀県芸術文化祭への若者の参加が少ないように思います。全国高等学校総合文化祭への派遣人数の方は、目標値を上回っているのですが、一般の若者が芸術文化に関わる人が少ないのは、ずっと気になっていまして、文学祭、美術展、写真展ではない部分で、けっこう活動しているのだろうなという気はするのですが、それが捉えられていないので。この指標だけでは、情報量が足りないのかなという気もしています。あまり幅を広げすぎても訳がわからなくなりますけど、少し視点を広げる必要があるのかなと思っています。</p> <p>それから、県立文化施設の文化ボランティアの数ですが、県立近代美術館が休館する間はボランティアはどうなるのでしょうか。いったん途切れてしまうと後が続きにくいと思うのですが、美術館が休館中にどういう対応をされているのか、というのが少し気になりました。</p> <p>美の資源を活用した地域団体等との連携事業の数が着実に増えているのは凄く良いことだと思っています。これも、ただ、どこまで広げるかというところが少しあるかもしれません。地域の寺社に関わるような、文化を維持していく活動ですね。そういったことや地元の祭りなどを維持していただく活動が入っているのか少し気になりました。</p> <p>最後に、1年間に芸術文化を鑑賞したことのある県民の割合と、文化創作活動を行ったことのある県民の割合ですね。創作活動にすごく沢山の方が参加されているというのは、このデータから受け取れますが、本</p>

当にそういう風に、まるまる受け取ってよいものか気になります。鑑賞したことがある人が多くて、創作したことがある人はその数値より少なめであるだろうと思われまので、そこが少し気になります。

委員

滋賀県には、たくさん魅力があるのに伝わっていないのだろうと思います。サイトの閲覧数などを見ていると、閲覧する人を待っているのではないかと思います。今は、飛び込んでいかなければならない。一瞬で「This is 滋賀県の文化」というような情報を、少なくとも毎月、飛び込んでいくように発信しなければならぬと思います。今はスマホに情報が向こうから入ってくる時代なので、一方的な情報発信は駄目なので、戦略を変えないといけないと思います。情報の伝わり方を、2、3年後の変化を、分析しながらやらないと、このままだと、どんどん忘れられていくのではないかと懸念しています。こういう大変化っていうのは、もっと早く考えていくことが必要だと思います。

委員

文化サイトの閲覧数が徐々に下がっておりますが、これはカテゴリーが変わったということでありましたけど、カテゴリー分けの基準みたいなものですね。それは、「暮らし文化」に限ったものと、「文化・芸術」に限ったもので言うと、ずいぶん広くなると思うのですけれども。それで、他のことにもつながるのですが、そういうカテゴリー分けの基準みたいなものをちょっとはっきりした方がよいという気がいたしました。

それから、重点施策2のところ、文化財等を活用した県実施事業参加者数ですが、これは参加者数で数値を出しておりますけど、これの団体参加の割合でいった場合どうなるのか気になります。また、教育委員会が実施した活動の数値だけでなく、もっと広く例えば文化振興課が担当となって実施した活動などもあると思います。そうするともっとカテゴリーが広がるはずだと思うのですが、その辺がこの人数だけでは、少し分かりにくいのではないかという気がしました。

委員

指標が増えているものもあるし、多少減っているものもある。この程度で増えたり減ったりすることをあまり気にするべきなのかというのが、私の第一印象です。32年の目標値が示されていまして、それに向けて施策を充実していこうということだと思うのですが、評価全体のことに関して言うと数値目標だけで、施策の目的が達成できたかどうかを測ること自体が、この基本方針がそうなっているので、それでこの評価部会が開催されているのだと思うのですが、それだけじゃないものも当

然あると思いますので、この評価部会会議を通じて、それを含めてこの施策の目標達成ができたかどうかを評価した方がよいのではないかと思います。

いわゆるアウトプット数値として、数値化できるものは数値化する。数値化できないものは、どうやって評価するのか、例えば先ほどインパクトという言い方をされていましたが、そういうことを目標数字の評価の次なのか、それとも並行なのかわかりませんが、検討いただいてもいいのかなと思いました。

国の文化芸術推進基本計画の中では、やはり指標というのを設定しようとしているのですが、そこに指標に対する基本的な考え方というのが盛り込まれていまして、指標はその指標であって、指標を目標にしないという言い方をしています。

それともう一点、文化サイトの閲覧数に関して、インターネットを利用する人は、圧倒的にタブレット、スマホが多いですね。そういったところの対応とか、あるいは SNS 等の発信とか、何かその辺りを含めて何をホームページに掲載しているかというよりも、そちらの方が戦略的には重要ではないかと思います。

事務局

文化ボランティアの数。これは美術館だけでなく、いろんな文化施設のボランティア数です。美術館は、この 4 月から休館しております。ボランティア、いわゆるサポーターについては、引続き活動していただいております。美術館のコレクションを成安造形大学に展示をしたり、またそれと組み合わせていろんなイベントを開催する等、そういうところに鑑賞者への解説をしていただいたり、あるいはその会場の案内をしていただいたりするボランティアとして美術館のサポーターの方にも積極的に関わっていただいております。

部会長

一貫して流れている問題意識が文化振興基本方針の重点施策には反映はされています。それをピックアップするやり方として、アウトカム指標を出すというのは、一応理想は理想なのですが、なかなか捕まえにくいので、いわゆる第一次アウトプットでいこうかと。出力しようとしてこじつけたことは事実です。だからといって、その数字を目標にすることはやっぱり危ないねと。そのとおりです。ただ、その心にあります延観光入込客数というのは、都市政策としての文化政策が、やはり観光とも連携していかない限り、発揮できないというのは確かなので、延観光入込客数を文化施策の指標とすることは、実は距離が遠いのですが、間接

的には影響を与えるだろうという参考指標です。実際に滋賀県には、たくさんの売りがあるのですが、特に近代性とか最先端性をも持っている、一方で京都に負けず劣らず文化財などの伝統的なものをいっぱい持っている。この新旧のコントラストが、実は滋賀の売りものではないか、という意見が出ていたのですが、それを戦略化するようなところまでは到達していません。戦略立案というところまでは行っていませんが、文化政策が延観光入込客数に間接的に影響を与えることが事実だということは、このデータに見て取れます。

関係文化サイトの閲覧数、これは影響があるに違いないと思っています。ただ、カテゴリーの基準点は何なのか、これは微妙だと、増えたり減ったりを一喜一憂しても仕方ないと。芸術文化だけでなく、「生活・文化」も評価部会の所管の中に入ってくるということを議論しましたよね。カテゴライズしたことの意義とか、変えたことの意義が分からないですよ。分からないものをそのまま結果論でこうなったと言われたら仕方ないね。と言うしかないわけで、評価のしようがないというのが答えかもしれません。ですけど、カテゴリーを変更しますよという考え方くらいは、一度少し所管に聞いてみた方がいいかもしれませんね。

文化財に関しましては、登録文化財を増やすことだけが目的ではないでしょう。登録文化財を使って、いかに文化政策を打つかの方が、この部会の所管であり文化政策の領分だという話をしてきました。文化財を増やすことの話は文化財保護課の話ですので、その文化財を活用した実施事業を指標に入れてくれるようになりました。

次に、芸術鑑賞した小中学生の数を増やさないといけないというのは、びわ湖ホールの存立をかけた論争ワークです。こんな贅沢品をつくって県外の人ばかりが来て、こういう建物にどれだけの値打ちがあるのだ。といったことをおっしゃる方が多い時代があったので、そうではなく、これは教育施設を兼ねているのだということを、たとえばホールの子の事業というものを実施して、そして、これを増やしていくと。びわ湖ホールを体験した子どもを 100 パーセントにするのだ、ということを、びわ湖ホールと本庁が話をし、作戦化したという経過があります。これは、そういった背景から出てきたということで、行政が私に下さったのが、子どもの体験学習とかですね。広い意味で、文化・芸術の体験学習を行う子どもたちにターゲット当てて、そのデータをとっていきましょうということ。ここにある心は、びわ湖ホールを守るだけじゃなく、滋賀県の将来は子どもにかかっているという危機意識です。この評価部会以外にもう一つの専門部会として次世代育成部会があるのは、その危

機意識を持っているからです。それをご理解いただけたらと思います。滋賀県の問題意識は、若者、子どもというところに非常に大きな価値をおいている、というふうにご理解いただけたらと思います。

アートマネジメント研修の受講割合、これはびわ湖ホールとか、行政側の方から積極的にご提案くださった指標です。県立文化施設の文化ボランティアの数もそうです。できれば、参考資料で良いので県内の文化担当職員の文化政策研修の受講人数とかを出してもらえると嬉しいです。アートマネジメントセミナーはホール担当者の専門研修が多いですよ。それよりも、地方公共団体が行う自治事務としての文化政策は、どういうミッションを持つべきなのか、これらを理解しないまま担当になっているということでは困るわけですけど。県は文化ホールを、たくさん持っていたが、市町に譲り渡した時以来、市町に対する支援が薄くなっている。そういう意味で今申し上げます。

それから次の、文化プログラム実施件数。これは東京2020に対応した指標。これから重要になってくると思います。たしか国の掲げる件数は全国で20万件だったと思います。やろうとするならば、1年間で市町村あたり14件程度やらないと、その数字は達成できない数です。県が率先して市町に対して、やりましようと言わないと数が間に合わないと思うので、これは大事。

地域団体との連携事業数というのものも、いわゆる住民自治における民間団体との関わりということで、大事な指標だと思います。

新生美術館に対する指標、これは新生美術館に対する私たちの期待が大きいということから、数値化してもらっているところです。

それから、文化創作活動を行ったことのある県民の割合、県の後援件数などは従来から使用している指標です。引き続きそのまま使っている指標や、新しく開発して指標としたものがあります。政策的に強化して、項目を増やしたものが幾つかあります。それを見たらうえて、実際にどうなのという構造的に評価をするのが、私はこの評価部会の仕事だと思います。だから、達成率が悪いからもっと頑張りなさいという話じゃないと思います。なんでこんなでこぼこになっているのだという理由がわかれば、その中身や構造を、変化を理解したうえて、じゃあこんな政策はどうだろうか、こういうところに対して強化しようと、というようなことを、ご提起いただけたら評価部会としての役割が果たせるかなと思います。

委員

生活文化という、数年間議論してきた問題をどう取り組むかということを考えていただければいいかなと思います。

- 部会長 新しい文化芸術基本法では、生活文化について非常に強く組み込んでいますからね。
- 委員 私は最近、地域活動とか、そういう活動の評価にすごく関心を持っており、そういうところで指標を作っていたことがあるのですが、なかなか文化と似たようなところがあって、目標達成ということが意外に難しい。目標があって無いようなものですから、そういう意味でも難しい。その時に活動の将来の可能性を引き出す、見つけ出すための評価というものが必要なのではないかということをおっしゃっています。文化芸術についても現在の状況はどうであるかということはあるんですけど、将来の可能性を引き出すようなもの、視点というものも必要ではないかと思っています。これらの指標をそれぞれ見れば、将来の可能性を引き出す部分も、いくつか見受けられるのですが、そういったものを伸ばしていければと思っています。
- 委員 私は、伝わらないと何も始まらないと考えていますので、京都や奈良との違いを、はっきり打ち出すべきだと思います。京都と滋賀の位置関係から、パリの郊外のような雰囲気は有効でしょうし、庶民の文化の歴史も有効だと思います。それをどんな風にイメージ展開するのか、京都や奈良とは全く違う深い文化がここにあるのだというブランディング施策をしっかりと決めた上で、ホームページをスマホから見られるとか、しっかりと戦略的に SNS を出して行って集めるなどといった手法論を進めるべきだと思います。
- 部会長 それをやるとするならば、市町ならシティプロモーションと最近では言われておりますが、その戦略を担当する部局ってどこなのでしょう。
- 事務局 平成 27 年度までは企画調整課、平成 28 年度からは広報課です。いま東京には「ここ滋賀」というアンテナショップができました。広報課が企画調整課から引き継いで開設したものです。
- 委員 文化というのは、県でも市でもそうでしょうけどいろいろな部局に関わることになっているわけで、こういった指標を出せるのはやっぱり文化振興課なので、単なる部局ではなく、言ってみれば滋賀県の文化政策

というものを包括するという形で、そういう広くまとまりのある考え方で、文化振興課には、もっと強く他の部局に対して言われても良いのではないかという気はします。

委員

部会長には、ご説明いただきましてありがとうございます。大変よくわかりました。それで観光に関しては、文化芸術振興基本法において観光への波及ということが、明確にありますので、これを指標としているのは正解だという風に思います。

文化プログラムに関しては、文化庁は特に20万件という数字を出したのですが、もともとイギリスが18万件という数字がありました。実は、18万件は誤植で12万件だったという、その誤植の数字をもとに20万件という目標を設定されたこと自体が、とにかく文化プログラムを一生懸命やろうという、ある種の旗振りの数字であったのだと思います。そこも本当に件数があるかどうかというのは、ちょっと議論が湧くとこなんじゃないかなという風に思います。

あと、ちょっと気が早いのですが、32年度の目標数値が出ていて、これに向けて施策を充実していくということなのだと思うのですが、その目標数字って、今後慎重に考える必要があると思います。というのは、永遠に右肩上がりということは有り得ない訳ですし、人数や目標値も、これから人口が減るわけですね。しかも高齢者が圧倒的に増えていって、身体の不自由な人がどんどん増えてきたときに、人数が減少する要因があるわけですね。そうなったときに、身体の不自由な高齢者の方も文化施設に行くことができいくかどうか、ということの方が、指標としては重要になるのではないかと思います。32年度まではこの基本方針が定められていますから、改訂するときには、その辺りも含めて、ご検討いただいてもいいかなというように思います。

部会長

子どもの数は減っていくなか、体験する子どもの絶対数を追求すると厳しいかなと。むしろ、学年の定員に対してどれだけの率が参加したかと。比率でいった方がいいかもしれませんよね。だから、率としては維持しているとか、それに対して達成できないから仕方がないとかを分かるようにしていただければ良いと思います。それから、文化創作活動の範疇の中に、国の法律では舞踊も入っていますよね。そうするとダンスに参加している若者を探してみたら、もっと数値が上がるかもしれない。どこかで拾えないかな。

(2) 平成29年度における個別事業評価について

委員 アール・ブリュットの展示も、大事じゃないかと思っています。アール・ブリュットを活かす取組を行うということは、けっこう各市町が模索というか、これから考えることだと思いますので個別事業評価させていただいた方が良いのかな、あるいはアイデアをもらえると、私どもは嬉しいので、これから掘り出していく必要がある分野だと思います。

委員 私もアール・ブリュットは、何らかの形で、個別事業評価の対象事業に入ると良いなと思います。

委員 11月23日のアール・ブリュット展に行きます。

部会長 それでは、アール・ブリュットによる「ひと・まち・空間」形成事業と、滋賀県次世代育成ユースシアター事業音楽劇「美味しいメロディ改」の2事業で実施するということですか。

事務局 いったん23日につきましても委員の皆様方にまた正式に通知をお送りさせていただきますけれど、受け入れの先の都合がございます。そちらの方に対する調整がございますので、そのへんも踏まえましてご連絡をさせていただきたいと思っております。

(3) 報告事項

・滋賀県文化審議会第18回会議の概要について
〈意見、質問なし〉

・東京2020大会の文化プログラムについて
〈吉本委員説明〉

委員 人口3000人の街で、よくこれだけ催事ができましたね。

委員 イギリスの場合、地方行政の仕組みが日本と違っていています。スコットランドにはクリエイティブスコットランドという、アーツカウンシルに

相当する組織があつて、その補助金も出ていますし、民間の補助金も出ているということで、自分たちでお金集めています。

委員 その辺が、日本と違うなという感じなのですね。

委員 なおかつ、ベネズエラからやってきたシモン・ポリバル・オーケストラなどは子どもたちの音楽教育ということをミッションにしているので、それが、3000人の町でやっていることと重なって彼らの教育に参加する、ということになったと思いますね。そのためには、さっきも紹介しましたが、ロンドンのサウス・バンクにあるロイヤル・ナショナル・シアターという国立の劇場があるのですが、その教育もやっています。いろいろな事をやっては実現しています。

委員 ベネズエラと結びつくっていうのは、面白かったです。

委員 システマといいますのは、ベネズエラが発祥なのです。ベネズエラというのは、子どもたちは貧困で犯罪を犯したり社会問題があつて、それをどうにかしたいということで、ある種の社会活動的な音楽活動が生まれました。そういったことで非行にはしるくらいなら、しっかりと音楽教育をしよう。集団で学ぶこととか何かを達成するというを目的としており、音楽家を育成するためにやっているわけではない。そんな中、凄いアーティストも出てきています。

委員 毎年「大阪城ホール」で開催される「1万人の第九」と仕組みが似ていますね。素人の人が1万人集まって、練習を重ねての一大イベントです。9歳～90歳までの人が参加しています。日本にもすぐ近くにお手本があるので、びわ湖ホールで子ども版を作ったらどうですか。楽器っていうのは日本では、なかなか難しいかもしれませんが、歌うことは可能なので、もしかしたらオペラの子供版も可能かもしれません。日本人の場合はゴールを決めないと進めないから、曲目などをびわ湖ホールで作ったら、いま吉本委員がおっしゃったような目的が達成できるのではないかなという気がしました。楽器までは、ちょっと敷居が高いように見えてしまう可能性があるのです。

委員 私が1つに提案しているのは、「250万人の第九」です。なぜかといいますと、2020年は、ベートーヴェンの生誕250年なのです。それで、大

阪城は1万人ですよ。ですから、他にも1万人規模のものが全国にいっぱいありますよね。パラリンピックの閉会式のときに全国で第九を歌うということを提案しています。面白いのではないかとっていますが、どこも始めないのですよ。滋賀県が最初に開催して全国に呼びかけたら、滋賀県発祥の全国文化プログラムになるのではないのでしょうか。徳島県は、第九を文化のモチーフにしております、ひょっとしたらやるかもしれないですね。

委員 子どもの第九いいですね。びわ湖ホールでやってもいいかもしれませんね。

部会長 新しい文化芸術基本法の精神からも、これはものすごく委員がおっしゃっているスコットランドの取組にあたります。基本法の精神には、ソーシャルインクルードが全面に出ています。それから、社会的な少数者や弱者に対する権利ですね。アートのアクセスってところから、差し込んでいくという思想ですね。私はレガシーというのは、やっぱり次世代に残す、次世代を育てる、あるいは、そういったことを意味づけて仕組みを伝承する。そういうところがコンセプトではないかなと思います。そのために、びわ湖ホールとか市町のいろいろなホールとの連携をどのように、有機的に組み立てていって、大滋賀県音頭を起こせるかなという話なのかな。そうすれば、一気に勢に県と市町との連携ネットも完成してくるのでないでしょうか。これはチャンスですよ。ちょっと、よそよそしく他人行儀になってしまった市町と県との関係を、もう一度近い関係に戻せるのではないかという気がしますね。これは大変インスパイアされました、

それと、イングランドの一番北端にあるリーズという町がありまして、そこはこれと似たことがあります。イングランドのアーツカウンシルも、そこに関わっているのですが、ここにはスコットランドのアーツカウンシルも関わっているのですかね。ヘイデイズとかね。麻薬でドロップアウトした子ども、非行でドロップアウトした子どもなどを全てピックアップして、リーズのコミュニティシアターで演劇教育しているのです。その子どもたちは、なぜ私がここに来たのかということ再現実しようと。こういう犯罪を犯したからここに来ているのだと。今から自分のことを客観化して君たちに教えるという、そういった個人ドラマを演劇化して、それで完成させるというのが第一ステップ。それをやることによって自分を客観化して表現できる。そういう風にして学校に復帰していくとい

う空間があるのですよ。こういうものを音楽でやったらどうなるのか。けっして彼は社会からはドロップアウトしていませんが、貧困階層を含めて全部包み込めるわけですね。だから、貧困階層だけをターゲットにあてているわけでない。そういう考え方って、やっぱりイギリスはすごいと思いました。

滋賀県はやっぱり次世代。子ども・若者。その姿をアートでどれだけ元気づけるか、仲間作りできるか。共同体に溶け込んでいく訓練になっていけるか。そういうところをアートが見つないでくれるのではないかという気がします。

これをもって、終わりとしたいと思います。本日は、ありがとうございました。

事務局

〈閉会の挨拶〉